



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2017

vol. 23

ゼミナールの効用

教育推進部長 良永 康平



文系であれ理系であれ、少人数教育、特にゼミナールが、様々な意味において重要であることは間違いない。本学「教育後援会」の機関誌『葦』を見れば、ゼミナールの意義について各学部の先生方がほとんど毎号のように言及している。単なる知識の伝授ではなく、学生自らが問題を発見、提起でき、教師のアドバイスを得つつ先行論文を検討したり、フィールドワークや実験したりしながら、その解決策や糸口を求めて主体的な関わりができる。これぞまさにアクティブラーニングである。他にもそのような講義、講座、研修等が開講されているが、ほとんどの文系学生は少なくともゼミナールには積極的に参加することによって、従来自己形成をしてきたと言っても過言ではないだろう。

そしてさらに合宿や旅行、懇親会、他大

学との合同ゼミナール等を通じた人と人との関わりの中で、人間的な成長やコミュニケーション力を育んで、社会に旅立っていった。だからこそゼミナールは大学時代の貴重な思い出の一つであり、掛け替えない生涯の友との出会いの場であり続けている。このようなゼミの重要性は、現在進行中の教学IRプロジェクトによる「卒業時調査」によってさらに鮮明に、そして様々な角度からも明らかにされてゆくことだろう。

とはいえ、ゼミナールを主催する側からすると、様々な動機や背景を持つ学生を、一丸となって主体的に取り組むように誘導するのはなかなか難しい。書物や論文を輪読しているだけでは、知的好奇心や探究心も生まれにくい。どうやって学生を覚醒させ、主体的に関わることを体得させるか、教師

の腕の見せどころである。

教員はそれぞれに工夫して、ノウハウを持っていると思われるが、小生の場合は学内外で開催されるプレゼンやディバートの大会を1つの目標に設定し、他のゼミとの競い合いのなかから、学生の心に知的な好奇心を呼び起こす工夫をしている。幸い、経済学部と商学部には「経商ゼミナール大会」という伝統の行事があり、研究報告やディバート、プレゼン大会等が師走に開催されている。また「日本学生経済ゼミナール」という全国組織が、全国大会や関西ブロック大会を開催している。こうした大会に出場し、他大学の士気の高い研究報告や熱意ある学生との交流を通して、ゼミ生達のモチベーションが育ってゆく。まさに「井の中の蛙よ、大海を知れ!」である。